自尊感情を高める小学校４年生の学級集団づくり

―学級内の対人関係づくりと話合い活動の実践を通して―

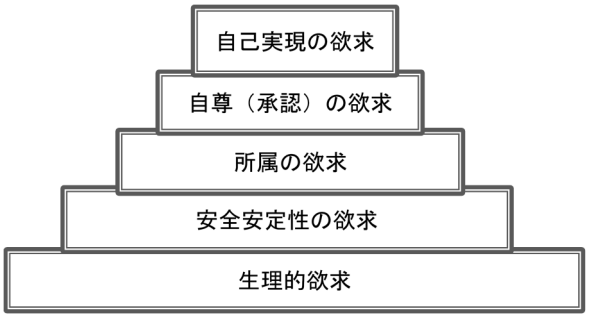
さいたま市立大宮小学校　教諭　深 井　正 道

Ⅰ　問題の所在と目的

次期学習指導要領では、2030 年の頃の社会とその先を見据えて、学校教育で育てたい児童生徒の姿が示された。前文には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」[1]とある。人工知能が進化したり超高齢化社会が迫ったりして、激変する社会を生き抜くためには、決まったことを効率的にこなすだけでなく、自分から進んで他者と協働して困難な課題に立ち向かい、新しいことを創造していく力が必要だ。そして、そのような児童生徒を育成するために、各学校において「主体的・対話的で深い学び」の授業の実現が求められている。

このような時代背景の中、私は、「どのようにしたら、児童生徒自身から、『学びたい』『活動したい』という意欲が湧き出てくるのか」という道筋を明らかにすることが、重要だと捉えた。なぜなら、教師や保護者が「勉強しなさい」「友達と一緒に活動しなさい」と言い続けても、思うように意欲が育つものではないからである。児童生徒の心理的な面にも目を向けて、各教科等の手立てを講じることが「主体的・対話的で深い学び」の授業の実現につながると考える。

そこで、私はアメリカの心理学者マズローの欲求階層説に注目した。人間の欲求は階層をなしていて、低層の欲求が満たされることで高層の欲求があらわれるとしている。



マズローの「欲求階層説」

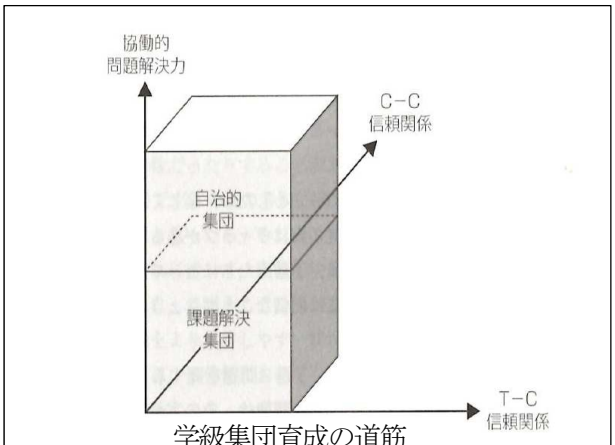
私は、児童が「○○になりたい」「□□ができるようになりたい」と夢や目標をもった時、目を輝かせて、がむしゃらに学習や活動に取り組む姿を見てきている。これは、人間のもつ「自己実現」の欲求でのあらわれであり、そういった児童の姿を学校教育では目指しているのだろう。しかし、この欲求が現れるためには、下層の４つの欲求が満たされなければならない。小学校の場合、児童は多くの時間を学級内で過ごすため、次のような状態が必要だと捉える。児童が、十分な睡眠や食事がとれていて（生理的欲求）、学級内で暴力や暴言などを振るわれず（安全安定性の欲求）、学級を自分の居場所だと感じて（所属の欲求）、学級内で自分が認められたと感じて（自尊・承認欲求）自尊感情が高まった状態である。

これらのことは、学級経営と深く結びついている。つまり、「主体的・対話的で深い学び」の授業を実現するためには、指導法改善も大切だが、その前に学級経営を充実させて、学級集団をつくることが重要なのだ。次期学習指導要領の総則「児童の発達の支援」の配慮事項には、「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」[2]とあり、その重要性が述べられている。

これまでのことから、私は、担任する小学校４年生において、学級集団づくりを基盤として児童の自尊感情を高めていくことを研究の目的とした。

Ⅱ　先行研究の検討

上越教育大学教職大学院の赤坂真二氏は、学級集団育成の道筋を次のように示している。[3]



学級集団育成の道筋

まず、教師と児童（Ｔ－Ｃ）の信頼関係が深まると、学級内にルールがうまれ、次に児童同士（Ｃ－Ｃ）の信頼関係が深まると学級内にリレーションがうまれる。すると、学級内の児童に安心感がうまれる。これが、自尊感情を高めたり、新たなことに挑戦する意欲を喚起したりする基盤になる。このような学級集団で、生活や学習における課題解決を繰り返し、学級の協働的問題解決力が高まると、児童の自尊感情も高まり、自治的集団が育つというものである。

Ⅲ　研究の仮説と方法

本研究では、先行研究を手がかりにして、次のような仮説をたてた。

信頼関係が深まった学級集団において、協働して問題解決する経験を重ねれば、児童の自尊感情が高まるだろう

そして、次の手順で実践を行うことにした。

第一に、教師と児童の信頼関係を深める手立てを日常的に実践すること。

第二に、児童同士の信頼関係を深める手立てを日常的に実践すること。

第三に、協働して問題解決する経験を学級活動の時間を中心に重ねること。

また、時期によってそれぞれ指導の重点を決めて実践を行うことにした。

Ⅳ　効果の測定材料

一つ目として、教師と児童の信頼関係の深まり、児童同士の信頼関係の深まりを測定するために、広島大学大学院の栗原慎二氏らが開発した学校環境適応感尺度「アセス」を使用する。アセスは、「生活満足感」「学習的適応」「対人的適応（下位因子「教師サポート」、「友人サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的関係」）」[4]で構成される。本研究では、教師と児童の信頼関係の測定のために「教師サポート」、児童同士の信頼関係の測定のために「友人サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的関係」の項目を使用する。9月初めと 11 月末に実施して、児童は５段階で回答する。

二つ目として、問題解決する力の高まりを測定するために、自作アンケートを使用する。問題解決の見通しをもって思考して、実践できたかを測定できるように項目を設定した。5月末と 11 月末に実施して、児童は４段階で回答する。

三つ目は、自尊感情の高まりを測定するために、さいたま市全小中学校で年３回実施されている「心と生活のアンケート」を使用する。「心と生活のアンケート」は、「解決スキル」「言語的スキル」「信頼他者」「信頼自己」で構成される。本研究では、自尊感情の測定で「信頼自己」の項目を使用する。４月末と 10 月末に実施して、児童は４段階で回答する。信頼自己は、Ａ～Ｅの５段階で示される。本研究では、Ａ・Ｂ判定を自尊感情の高い児童、Ｄ・Ｅ判定を自尊感情の低い児童とする。

Ⅴ　実践の内容

１　教師と児童の信頼関係を深める実践

持ち上がりの学年であったが、クラス替えがあって、学級の半数の児童が入れ替わっていた。そのため、４～５月を重点として、次のような実践を行った。

（１）教師の願いを様々な場面で伝える

始業式後の学級開きで、「一人ひとりの心がホッとするクラス、何事にも熱い気持ちをもって本気で取り組むクラスにしていこう」や「人の喜ぶ姿をみて、自分も喜べる人になってほしい。人が悲しむ姿を見て、楽しむことはいじめで、それは絶対に許さない」と児童達の目を見ながら本気で語った。その後も、学級内で嬉しいことや問題が起きた時、行事の時などに、教師の願いを繰り返して伝えるようにした。教師の願いをしっかり伝えると、児童にもそれが浸透して学級目標にも反映されやすい。教師と児童が同じ方向を目指して活動に取り組むことができて、信頼関係づくりにつながった。

（２）授業時間外で児童とかかわる時間を多くもつ

業間休みや昼休みに、児童と一緒に遊んだり雑談したりすることを大切にした。特に、外遊びは一日一回以上行くことを目標とした。なるべく多くの児童に声をかけて、体を動かしながらコミュニケーションをとった。また、給食時は、生活班を順番に回って一緒にごはんを食べるようにした。４、５人ずつゆっくり話すことができるため、習い事や好きなゲーム、就寝時間や家族のことなど様々なことについて話すことができた。教師が児童に積極的にかかわろうとすることは、信頼関係づくりにつながった。

（３）児童を勇気づける

アドラー心理学の「勇気づけ」の考え方をもとに、児童を進んで認めるようにした。できたことだけに注目するのではなく、存在を認めるように心がけた。特に、「ありがとう」という言葉を多く伝えるようにした。「話をきいてくれてありがとう」「静かに待っていてくれてありがとう」「学校に来てくれてありがとう」などである。数年前から実践をはじめて、最初は照れくささやぎこちなさがあった。児童が教師の話を聞いたり学校に来たりするのは当たり前だと考えていたからである。教師は児童を指導するという関係から、自然と

縦の関係で考えることが多かったのだろう。しかし、形式的にでも「ありがとう」と言っていると、「対等な人間として感謝の気持ちを伝えたい」と思えるようになって、教師と児童を横の関係でも考えられるようになった。「指導すべきことは指導するが、自分と同じ一人の人間として接する」と心から思えたことが、児童を認める姿勢にあらわれ、信頼関係づくりにつながった。

（４）学級通信の発行

学級通信に個人名を挙げて、児童のがんばっていた姿を紹介した。以下は、その内容である。

○○さん、理科の授業の用意を進んで担当の先生に聞きに行ってくれました、ありがとう！ □□さん、運動会の表現の練習の時に大きな声をだして周りをひっぱってくれました、ありがとう！ △△さん、大きな声で返事をしたりあいさつをしたりしていました、すてきです！ ◇◇さん、１年生の給食当番が困っている時に進んで助けていました、すてきです！

私が学級通信を配ると、児童達はすぐに読み始めて、自分の名前が載っていると嬉しそうにしていた。周りの児童の名前を見つけると「あったね」と声をかけあっていた。また、家庭訪問で保護者の方に、「親子で学級通信を楽しみにしています。次は、いつ名前が載るかなって言ってるんですよ。他の子の様子もわかっていいですね。」と言っていただくことがあった。学級通信を媒介すると、教師からだけでなく、保護者や友達、友達の保護者からも児童は承認されるので、より効果が高かった。本年度は、４月～11 月中旬までの間に、学級通信を 36 回発行している。その中で、本学級全児童 38 人のエピソードを３回ずつ（計 114 回）紹介している。

２　児童同士の信頼関係を深める実践

新しい学級に慣れてくるが、児童同士の人間関係が固定化し始める６～７月や行事の多い９～11 月を重点として、次のような実践を行った。

（１）帰りの会の「今日のありがとう」コーナー

児童同士で、本気の姿を紹介したり感謝を伝えたりするコーナーを帰りの会で設定した。４月から行っていたが、「１週間に１回は全員が発表しよう」という目標を６月に設けて、発表を促進した。また、１回発表すると「ありがとうポイント」が１ポイント貯まるシステムを導入して、学級全体でポイントを貯めた。一定数ポイントが貯まると、担当の係がレクを企画して、みんなでお祝いをした。1000 ポイントの時は、くす玉を作って祝賀会を開いた。11 月中旬の段階で、1470 ポイント貯まった。一日平均 12 人が発表していることになる。認め合いの日常的なシステムがあることで、児童同士のかかわりがうまれ、関係づくりにつながった。

（２）係活動やプロジェクト活動

係活動は、学級を楽しくするために創造的な活動を行うものであり、自然と児童同士が協力して互いのことを考える場にもなっている。そこで、係活動を活発にするために、道具と時間を工夫した。道具の工夫として、係紹介のカードの下にミニホワイトボードを１つずつ設置した。そして、イベントの予告やお願いなどをいつでも発信できるようにした。カラフルなホワイトボードペンや磁石も置いてあるので、各係で工夫している。毎日書きかえる係もあるが、多くの係は１週間に１回程度書きかえていた。時間の工夫として、金曜日の朝休み後 10 分間や給食の時間などを活用した。本校では、金曜日の朝休み後 10 分間を「学級の時間」として、各学級裁量で使っていい時間となっている。本学級では、基本的にその時間を係活動の時間として、各係のイベント開催や打ち合わせなどに使った。定期的なイベントとして、お誕生日会やありがとうポイント祝賀会などがある。給食の時間は、不定期で発表や連絡などを行った。コントを披露したり、スタンプラリーやイラストコンクールの説明をしたりした。また、常設の係とは別に、学級活動で扱った議題をもとに、期間限定のプロジェクトを発足させた。１学期は、トイレのサンダルを揃えるポスターを作成するために、「サンダルプロジェクト」。２学期は、運動会を盛り上げるための「運動会盛り上げプロジェクト」が発足した。児童の立候補制で、常設の係と掛け持ちができる。学級や学校をよくしたいと思った時に、そのチャンスがあることは、児童の活動を活発化することにつながる。係活動やプロジェクト活動が活発になると、児童同士のコミュニケーションの機会が自然と増えるので、信頼関係づくりにつながった。

（３）うなずきやあいづちの指導

授業でも日常生活でも、話を聞くことは、相手を認める一つのサインになる。話を最後まで聞く、アイコンタクトをして聞く、肯定的に聞くなどのほかに、うなずきやあいづちをうって話を聞く指導を大切にした。うなずきやあいづちをすると、話し手に「あなたの話をしっかり聞いてます」と伝わりやすいからだ。児童には、「無反応で聞かない。必ず反応するように。」と４月に伝えた。最初は、大げさだと思うくらいやることが大事だと言い、私が率先して行った。すると、徐々に慣れてきて、６月くらいから「あ～」「へぇ～」「お～」などが出るようになった。そして、９月にあいづ

ちの目標を全員で作った。その時に、決まった目標が「あ～＋ひと言」だ。「あ～、なるほど」「へぇ～いいね」「お～そうだったのか」など、自分の気持ちをひと言入れた方が、相手に伝わりやすいからだ。ひと言付け加えることはまだ練習中だが、今では全員があいづちを意識しながら話を聞くようになった。話の聞き方を全員で共通理解して実践することで、互いを認めようとする気持ちが育ち、信頼関係づくりにつながった。

（４）ミニ先生制度と共通目標

新しい学級に慣れてきた頃から、算数の時間に、練習問題が早く終わった児童を「ミニ先生」として教え合いを行ってきた。解き方が分からない児童は、ミニ先生に質問して一緒に問題を解く。解き方を理解したら、最後に同じ問題を自分一人で解いて、正解できれば合格。分からなければ、もう一度ミニ先生に聞いて、理解してから問題を解き直す。最終的には、全員が自分一人の力で練習問題を解けるようにすることを目標にして、教え合いをした。また、「『分からないから教えて』『困っているから助けて』という発信をどんどんしよう。助けを求める力は、大切な力です。」と児童に何度も呼びかけ、教え合いを恥ずかしがらない雰囲気づくりに努めた。徐々に、教え合いの教科を広げて、国語の読解場面、社会の地図学習、体育の技能習得などでも、全員で目標達成できるように取り組んでいる。共通の目標と教え合いのシステムを整えることで、児童同士で進んでかかわるようになって、信頼関係づくりにつながった。

３　学級活動の実践

11 月中旬までに、学級活動で話し合った議題は、23 個だった。それらを「つくる活動」、「やる活動」、「解決する活動」で分類すると次のようになった。

分類	数	議題例
つくる活動	7	・学級目標を作ろう ・クラスのマークを作ろう ・運動会で一人ひとりがヒーローになる係を作ろう
やる活動	3	・前期の係や代表委員ありがとう集会を開こう ・みんななかよしチャーハン集会を開こう
解決する活動	13	・給食の「ごちそうさま」の時間が遅れないために、どうしたらいいか。 ・そうじロッカーの前が混雑して、危ないがどうしたらいいか。

年度当初は、係活動や学級目標など学級の枠組みをつくる活動が多かった。その後、集会活動や解決する活動が多くなった。「やる活動」が少ないように感じるが、学級活動の時間外でも、業間休みに週１回以上学級レクを行ったり、金曜日の朝に設定された係活動の時間を活用して各係主催のレクやイベントを行ったりしているので、学級内の集会活動はもっと多い。

学級の実態に合わせて適切に議題選定していくことが大切だが、本学級では「解決する活動」を積極的に取り上げた。話合いによって学級の困り事を解決していく経験が、協働的問題解決力を高めることに大切だと考えたからだ。はじめは、そういった議題があまり出なかった。しかし、「困っていること」や「もっとよくしたいこと」と言い換えて投げかけたり、児童が「どうしたらいいかな」とつぶやいた時に教師が「議題として提案してみたら」と言ったりすることで、徐々に議題が集まりはじめた。また、学級全体にかかわる議題だけでなく、個人の議題も扱った。その際は、比較的多くの児童が悩んでいることを議題として取り上げた。例えば、「忘れ物が多いので減らしたいが、どうしたらいいか」の時は、解決方法を出し合う段階は全員で行って、最後の解決方法の決定は提案者に行わせた。また、他の児童にも「自分だったらどうするか」を考えさせて、最後に意思決定させた。現行の学習指導要領では、学級活動（１）が集団決定、（２）が個人決定、次期学習指導要領では、（１）が合意形成、（２）（３）が意思決定となっているが、どの項目でもよりよい解決方法を考える話合いは学級全体で協力して行うことが例示されている。昔は近所で困ったことがあると、お隣さん達が集まって井戸端会議がよく開かれた。家族で困ったことがあると、家族会議が開かれた。しかし、現在は近所のつながりが薄れたり、多様なライフスタイルの影響で家族のつながりが薄れたりして、そういった姿は減ってきたように思う。そのため、せめて学校では、友達が困っていたら、みんなで知恵を出し合って解決しようとする経験が、重要になってくるのではないかと考える。「解決する議題」の場合は、話合いの一週間後を目安に実践の振り返りをしている。うまくいかない時は別の解決策を話し合うこともある。「なすことによって学ぶ」という特別活動の方法原理から、児童自身が試行錯誤する経験を大切にしながら、話合い活動の指導をすすめた。

Ⅵ　結果と考察

１　教師と児童の信頼関係

	時期	平均値	標準偏差
教師サポート	9 月初	59.7	15.7
	11 月末	66.5	16.0

教師サポートの平均値が大きく上昇して、標準偏差にほぼ変化がなかった。このことから、教師と多くの児童の信頼関係が深まったといえる。以下は、教師サポートを構成する質問項目の分析である。

	時期	平均値	標準偏差
困った時に助けてくれる	9 月初	4.66	0.66
	11 月末	4.66	0.62
信頼できる	9 月初	4.50	1.02
	11 月末	4.68	0.61
わたしのことをわかってくれている	9 月初	4.26	0.75
	11 月末	4.61	0.63
わたしのいいところを認めてくれている	9 月初	4.58	0.85
	11 月末	4.82	0.51
わたしのことを気にしてくれている	9 月初	4.05	0.92
	11 月末	4.45	0.75

＊質問項目の主語は全て「担任の先生は」

「担任の先生は、わたしのことを気にしてくれている」の平均値が 0.4 近く上昇したことと、「担任の先生は、わたしのいいところを認めてくれている」の平均値が 4.82 とかなり高い数値だったことに注目する。９月から 11 月にかけては、運動会、たてわり活動、校外学習などの行事が多かったため、児童を認める声かけや学級通信で児童の姿を伝える機会が多かった。また、行事の課題や児童同士の問題を解決するための声かけも多かったように思われる。信頼関係を深める上で、日常的な取り組みに加えて、行事への取り組みも大きな役割をはたすこと、問題が起きた時こそ教師の声かけが効果的になることなどが考えられる。

２　児童同士の信頼関係

	時期	平均値	標準偏差
友人サポート	9 月初	61.2	17.4
	11 月末	64.6	14.8
向社会的スキル	9 月初	58.8	14.0
	11 月末	62.6	13.9
非侵害的関係	9 月初	68.5	13.6
	11 月末	70.4	12.8

どの項目もの平均値が上昇して、標準偏差が小さくなっていることから、学級全体で児童同士の信頼関係が深まったといえる。係活動や教え合いが上手になったこと、行事を通して児童同士のかかわりがさらに増えたことなどが考えられる。以下は、11 月の帰りの会の「今日のありがとう」コーナーの発表コメントである。

- ○○さんが「一緒に遊ぼう」と誘ってくれました。
- □□さんがマラソン練習の時に「あともう少し」と応援しくれて嬉しかったです。
- みんなが本気で合唱の練習に取り組んでいました。

自分の気持ちを入れて伝えたり、学級全体を考えて発言したりすることが増えてきた。また、１学期よりも認め合う視点が増えてきたように感じた。児童同士のかかわる量が増えること、かかわり方の質が高まること、この二つが達成できると効果的だと考えられる。

３　問題解決すること

	時期	平均値	標準偏差
提案理由やめあてが分かった	5 月末	3.74	0.50
	11 月末	3.89	0.31
提案理由やめあてにあった意見を考えられた	5 月末	3.71	0.51
	11 月末	3.74	0.44
話合いで意見を発表することができた	5 月末	3.47	0.75
	11 月末	3.45	0.75
話合い後、活動することができた	5 月末	3.66	0.53
	11 月末	3.63	0.53

「提案理由やめあてが分かったか」の平均値が上昇していることから、解決後の姿を思い浮かべ、見通しを持って、話合いができるようになったといえる。しかし、発表や話合い後の活動に関する平均値が下降したことから、実践力は課題である。１学期後半から、「解決する活動」を多く扱うようになってきた。そのため、発表を難しく感じる児童もいたと考えられる。また、試行錯誤を大切にしているため、最初から解決方法が成功しないこともあった。そのため、活動ができていないと感じる児童もいたと考えられる。

４　自尊感情

<table>
<tr><td>判定</td><td colspan="2">4 月末</td><td colspan="2">10 月末</td></tr>
<tr><td>A（高い）</td><td>7 人</td><td rowspan="2">20 人</td><td>11 人</td><td rowspan="2">24 人</td></tr>
<tr><td>B</td><td>13 人</td><td>13 人</td></tr>
<tr><td>C</td><td colspan="2">15 人</td><td colspan="2">12 人</td></tr>
<tr><td>D</td><td>3 人</td><td rowspan="2">3 人</td><td>2 人</td><td rowspan="2">2 人</td></tr>
<tr><td>E（低い）</td><td>0 人</td><td>0 人</td></tr>
</table>

自尊感情の高い児童が増加して、自尊感情の低い児童が減少した。また、個別に見ると、判定が上がった児童が 13 人、判定が変わらなかった児童が 20 人、判定が下がった児童が５人だった。下がった児童は、B→Cが３人、A→Bが２人で、自尊感情が低い状態ではなかった。

Ⅶ　全体考察

これまでのことから、教師と児童の信頼関係、児童同士の信頼関係を深めることにおいて、かかわる量と質の両方が重要であると分かった。まずは、かかわる機会を増やすこと。そして、同じ目標をもって活動したり共感して話を聞いたりすることが、教師からも他の児童からも「認められている」という感覚につながることが示された。

そして、仮説の「信頼関係が深まった学級集団において、協働して問題解決する経験を重ねれば、児童の自尊感情が高まるだろう」は、アンケート結果から検証された。自分の思いを表現する力や実践する力など問題解決に必要な力を高めていければ、さらに達成感や成就感を得て、自尊感情が高まっていくだろうと推察できる。

Ⅷ　今後の課題

協働的に問題解決するために必要な力とそれを高めていくための手順や手立てを明らかにする必要がある。達成感や成就感、自己有用感等を継続して持たせることが、自尊感情の低い児童の底上げにつながったり、自尊感情の高い児童が意欲を持ち続けたりすることにつながると考える。

また、話合い活動と実践の記録を分析して、どんな言葉、どんな場面で児童の自尊感情が高まっているのかを明らかにする必要がある。話合い活動や実践の量だけでなく、質を高めることが自尊感情の高まりにつながると考える。

最後に、自尊感情が高まることによって、意欲の高まりがどのような場面であらわれるのかを明らかにする必要がある。意欲のあらわれ方はさまざまであり、それを理解することが「主体的・対話的で深い学び」の授業研究や評価につながると考える。

引用文献

1 「小学校学習指導要領」文部科学省、2017
2 「小学校学習指導要領解説　総則編」文部科学省、2017
3 赤坂真二「スペシャリスト直伝！主体性とやる気を引き出す学級づくりの極意」明治図書、2017
4 栗原慎二・井上弥「アセス（学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト）の使い方・活かし方」ほんの森出版、2010